

日曜聖書講筈（婦選会館 公開集会）

イエスのバプテスマ

――マルコ伝第1章1～11節――

1964年4月5日

小池辰雄

還暦 聖書を生命する 「ペテロの福音書」 イエス・キリストの福音の始め 浸礼 回心のバプテスマ 道標する人 死生の転換 ただ神を求める 聖霊のバプテスマ キリストの中に使徒的な信仰 十字架のバプテスマ 十字架の言 御霊の世界 神の栄光の現れ

【マルコ1:1～11】（私訳）

1 マルコによるイエス・キリストの福音の始めは次のようであった。² 預言者イザヤの書に、『見よ、私はお前の面前にわが使いをやつて、お前の道の備えをさせる』と神が言いなさる。³ 或る声が曠野で叫んで言うのに、「お前たち、主の道を準備して、彼の諸々の道をまつすぐにせよ」と録してあるように、⁴ 浸礼者ヨハネが曠野に現れ、回心の浸礼（バプテスマ）を呼ばわつて、罪の赦しへと標した。⁵ するとユダヤ全国およびエルサレムの人々がみな彼のところに出てきて、自分たちの罪を告白し、ヨルダンの中に浸つて、彼からバプテスマ（浸礼）を受けた。⁶ このヨハネは駱駝の毛皮をまとい、腰には皮帯をめぐらし、蝗と野蜜とを食べていた。⁷ 彼は宣べ伝えて言った「私より強力な方が私の後から来られる。その方に対しては、私などは屈ん^{かが}でその靴紐を解くにも値しない。⁸ 私はあなた方を水で浸礼させたが、あの方はあなた方を聖霊でバプテスマなさるだろう。」

⁹ その頃、イエスがガリラヤのナザレから来て、ヨハネによつてヨルダンの中へとバプテスマされた。¹⁰ 流れの中から上がると、たちまち天が裂けて、鴿の如き御霊が彼の中に降りくるのを見た。¹¹ また天から声がひびいてきた、『これはわが子、わが愛する者ぞ、この者を私は悦ん^{よろこ}でいる』。

●還暦

私はこの3月で還暦、定年ということで、東大を去ったわけです。今日がその第一の日曜日です。第一の日曜日からこの婦選会館での集会を始めたわけです。

1940年から自宅で家庭集会の延長のような集会を開いておりました。20何年か、聖書をだいぶ学んで参りました。いよいよ、公のところでお話をすることになったわ



けです。人生の一番大事な部分で福音の第一線の立ち上がりをしていまして、人生の後半というところに来て、立ち上がるということは誠に神さまに対して申し訳ないようなわけです。しかしながら、私のような愚鈍な者にとりましては、長い準備が必要なのです。

私はちょうど20歳のときに信仰に入りました。内村鑑三先生、藤井武先生、塚本虎二先生という、いわゆる無教会の三人の代表的な方々の日曜集會に列席してまいりました。この三人の先生に相繼いで学んだのは、おそらく私一人ではないかと思えます。その後は、40年からは自宅で集會をしておりました。

60歳といいますが、今は別に珍しいことではない。私自身、齒はもうだいぶ痛めましてたけれども、気持は大体30歳ぐらいの気持であります。これから地上の生涯の果てるまで福音のために働きたいと、これを第一として動きたいと思っております。

そのような者でございますが、どういう回りあわせか、今日いらつしやった方々は、どうか、旅は道伴れで、神の国を迎える旅路を楽しくまた勇ましく共にしていただきたいと思ふものです。また、この旅の群はだんだん、神さまが増やしてくださるということを感じて、進んでまいります。もちろん、日本におけるキリスト者というものは極めて少ないので、おそらく人口の1%あるかないか。神が「これはキリストのもの」と言う、そういうクリスチャンがまたそのうちの何人であるかは知りません。

●聖書を生命する

最初に申し上げますが、聖書というものは、いわゆる研究の書ではありません。学校で学ぶようなわけのものではなくて、聖書は、日蓮の言葉をもつて言うところ、からだ身体で読む、しんどう身読する。また、聖書はドラマ、劇であつて、この活劇の劇中の人物に自分を投入して、そして、その現実においてこれに接する。単なる文字ではないということ、最初にしっかりと自覚していただきたいと思うのです。でないというと、いわゆる聖書をいくら読みましても、何年読んでも、これは一向らちがあかない。知識は増え、聖書について詳しくはなつても、それは聖書に関してであつて、聖書そのものを食べて飲んでいるという、そこにおいて生きていくというのとは別なわけではあります。

私もヨーロッパへ行つて参りましたが、あちらは聖書の学問は非常に進んでおります。我々は勉強するときに、英語やドイツ語の参考書はいくらでもあります。そういう学問的な研究は、神学者や神学生は進んでいますが、けれども、本当に聖書を身につけているかということになると、相当問題があるわけです。第一、教会に聖書をみんな持つて来ない。教会に聖書も讃美歌も備えてあつて、それを借りて読んで、後はまた返していく。そんなようなのが大体、いわゆるあちらの教会の聖書に対する態度です。ですから、私はドイツで、

「マルチン・ルターは聖書を炉辺の書として、みんなが親しんで読む書にした。身



体の一部分のごときもので、身体の延長のごときものである。私の持っているこの聖書はもう四冊目の聖書だ」

と、あちらで聖書のお話をしたときに、そう言いました。牧師さんが教会のお説教のときに紹介して、

「プロフェッサー小池がこう言った。あなた方も聖書を持って来たらよからう」と言った。ところが、やはり持つて来ません。

そんなわけで、キリスト教、聖書と言いましても、もはやヨーロッパ文化の――今までの歴史的な役割は果たし、これからもちろん果たしますけれども――彼らの魂の本当の糧になっているかという、非常に疑問です。むしろ、

「後なるものが先に」

とキリストが言われたように、我々、聖書を後から学ぶ者たちが、天国的な意味におきましては、先頭になる。福音は日本から逆に世界に本当の意味で流れていくというくらいの気宇をもつて進んでいいわけです。

その先駆者となったのは内村鑑三先生です。もちろん、教会の偉大な先輩たちもいらつしやいます。けれども、我々にとりましては、内村先生がそれを実にめざましくやつて行かれた。内村先生も『聖書の研究』という雑誌をお出しになった。もちろん、先生は「研究」とおっしゃつても、単なる研究ではない。先生の書かれたものを読みますと、実に生命が躍動しています。けれども、無教会は、だんだん歴史が経^たつてくると、学問的に非常に進んで――世界的水準のところనికిている人もあります――それであるだけまた反対に、聖書を生命^{いのち}するという意味においてどうであろうかという問題がだいぶあるわけです。

私はその問題性をとらえて、預言者たちが、また使徒たちが本当に旧約聖書を、神の言を彼らの生命としていたという、その預言者のまた使徒的な信仰をもつて聖書にぶつかるといふ、そういった極めて根源的なところに立ち返りたい。常に最も根源的なところに立ち返ることがまた同時に前進ということなのです。

そういう気持でこの聖書に対していただきたい。これは三度のご飯よりも――我々の肉体にとって、ご飯は大事ですけれども――魂にとつては神の言が本当の糧である。もったいぶつて敬遠しておくものではない。実に聖書ほど慕わしい本、また非常に重厚なそしてまた輝かしい本はない。この聖書の中には一切のものが入っている。文学でいいにしても、すべてのヨーロッパの文学は、直接ないし間接に、聖書からその源泉を汲んでいると言つて決して過言でないようなわけです。

●「ペテロの福音書」

福音書にぶつかるわけですが、

「福音書は全聖書の始めでありまた終りである」



と言ってもいいものです。ご承知のとおり、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネとありまして、マルコ伝が、学問的に言っても、これが一番基本的なものであるということはどうほとんど定説です。

マルコという人は、その名前はヨハネス・マルコといわれ、お母さんはやはりマリヤという名前の人です。そのことは使徒行伝12章12節のところを読むと、マルコの所を一つの集会所みたいにして、集まりをしていたようなわけです。バルナバという人がありますが、あれがマルコの従兄弟にあたるような人です。バルナバとマルコはパウロと一緒に第一回の伝道をして、後でちよつとパウロと具合が悪くなったことがあります、後にまた仲直りしています。特にペテロが非常にマルコと親しくて、ペテロはマルコのことを「自分の息子」と言っている。ペテロ前書5章13節に、「わが子」というような言い方をしている、非常に親しいわけです。もちろん、肉親の子ではないけれども。マルコというのは非常にペテロの影響を受けているわけです。

パピアスという人は大体、紀元103年頃に小アジアで牧会をしていた人ですが、

「マルコはペテロの通訳者である。マルコの福音書は、ペテロから聞いたことを土台にして書かれたものである」

ということを言っているそうです。ですから、「マルコの福音書」というものは、言い換えると、「ペテロの福音書」と言えないこともないくらいに、ペテロが口授した内容がそこに盛られているという。非常にペテロ的であつて、パウロ的なものではない。

福音書は、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝とありますが、おおざっぱに申しますと、マタイ伝は非常に言葉が整然と整えられて書いてあります。マルコ伝では、キリストの行為面、キリストがどのような事をなさったかという、言動の動の方、行為の方、これが端的に記されている。ルカ伝は非常に心の面、心情の面が豊かに盛られております。文学的というと、ルカ伝が一番優れております。知情意といいますが、人間の人格のはたらきのいわゆる知情意の三つの面が、このマタイ、マルコ、ルカでもってそれぞれ表わされている。大体の傾向といえますか、特色からいうと、そういう感じを、私は読んでいて受けるわけです。特に、霊的な深さをもつて、キリストの霊的な深さの面が語られているのがヨハネ伝というもの。これが聖なるものです。真善美に対して聖といいますね。知・情・意、真・美・善。そして、それに対して霊、聖ということ。そのように、有機体的に自然に特色ができてあがっているということが、何か不思議な感じがします。

この行為面を真先に私たちが学ぶというのです。

「では、キリスト教は信仰ではないか。信仰の信はどこへ行ってしまったか」

というようなわけでしょうが、もちろん、全部この中に信は入っている。そういう非常に簡潔な、生き生きとした力強い叙述です。マルコ伝を最初に1章1節から、とにかく当たってみたいと思います。私は自分の訳をたどりながらいきます。



●イエス・キリストの福音の始め

「マルコによるイエス・キリストの福音の始めは次のようであった。

「次のようであった」というのは、分かりやすく私が付け加えた。ギリシャ語ではただ「イエス・キリストの福音の始め」と書いてある。

²預言者イザヤの書に、『見よ、私はお前の面前にわが使いをやつて、お前の道の備えをさせる』と神が言いなさる。

神さまの言葉です。それは書いてないけれども、そういうわけです。

「預言者イザヤの書に、『見よ、私はお前の面前にわが使いをやつて、お前の道の備えをさせる』」

と。そこまでは実は、イザヤの言葉ではないので、旧約聖書のマラキ書3章1節と出エジプト記23章20節を混ぜ合わせたような言葉です。

「視よ、我わが使者を遣わさん。かれ我面の前に道を備えん。また汝らが求むるところの主、すなわち汝らの悦楽ぶ契約の使者忽然その殿に来らん。視よ、彼来らん。と万軍のエホバ云いたもう。」（マラキ3:1）

「視よ、我なんじの顔の前にわが使をつかわして、途にて汝を守らせ、汝をわが備えし処に導かしめん。」（出エジプト23:20）

とある。「顔の前に」というのは、本当に相對していることを、「顔の前に」という。これはヘブライ的な表現です。

「汝はわが顔の前に何ものも神とすべからず」

というのが、モーセの十誡の第一誡です。モーセの「十誡」と言いましても、あれはモーセの「十言」ということです。普通は「誡」と言っているけれども、実は「言」というヘブライ語です。その最初の一言、

「わが顔の前に何ものも神とすべからず」

はもう一つ言うと、本当は、

「お前にとつては、わが顔の前には、神々はない」

という断言なんです。

「イスラエルの民よ、お前は私の顔の前には、

他の民には神々はあるだろうけれども、

私の顔の前では、私の他に神はない。」

と。「あれどもなきがごとし」ということ。こういう実存的な一対一の関係を宣言しているんです。私は、旧約聖書のあるそこを訳すなら、そう訳したいところです。ところが、どの訳を見ましても、

「我の他に神を持つべからず」

なんて訳してある。それは、そういう意味は出てきますけれども、本来はそうではない。「顔



の前に」という、実に現実です。

カルビンには「神の面前に」ということを非常に強調した言葉があります。現前です。一体この信仰の世界はそういった現^{まへ}前的なもので、思われている世界ではない。事実、我々は神の面前にある。これを「より先んじて」というように訳す人もありますが、私はそう思わない。

「お前の面前にわが使いをやつて、お前の道の備えをさせる」

ということ。「お前」というのは、神さまがその御子キリストに向かって、「お前」と言う。私の言葉は乱暴かもしれませんが、それでも。

3 或る声が曠野で叫んで言うのに、「お前たち、主の道を準備して、彼の諸々の道をまっすぐにせよ」と録してあるように、

これはイザヤ書40章3節の有名な言葉です。

「よばわるものの声きこゆ^い云く、なんじら野にてエホバの途^{みち}をそなえ沙漠にわれらの神の大路^{おおじ}をなおくせよと。もろもろの谷はたかく、もろもろの山と岡とはひくくせられ、曲りたるはなおく、崎嶇^{けわしき}はたいらかにせらるべし。斯てエホバの栄光あらわれ人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語りたまえるなり。」（イザヤ40・3～5）

バビロニアに捕囚されたイスラエルの民が、新興国ペルシャの王様キュロスによつて解放されて、そしてエルサレムに帰ってくる。エルサレムへの帰還です。その時に現れた或る無名の預言者が語っているのがイザヤ書40章から55章までの、有名な第二イザヤです。

「神が通り給うから、その道をまっ直ぐに、また曲がったものは直^{なお}くしろ」

という。この頃、東京はオリンピックでだいぶ自動車道路をまっ直ぐにしたり平かにしているようですが。

それが「荒野に呼ばわる声」です。この洗礼のヨハネが即ち、このイザヤ書40章で言われるところの「荒野の声」であるわけです。「だから、お前たちはそうしなさい」と。

「道をまっ直ぐにしろ」

ということ、要するに

「お前たちの心をまっ直ぐにしろ」

ということなんです、ヨハネが言わんとしていることは。

「神さまを迎えるのに、曲がった心や暗い心ではダメだ。まっ直ぐになつていろ」

と。それが即ち、後で言う「悔改め」というところにもつながる。そういうわけで、このマラキ書や出エジプト記やイザヤ書の言葉がここに引用されたわけです。

● 浸礼

私は「洗礼」を「浸礼^{しんれい}」と訳しますが、私はいわゆるバプテスト派の人でも何でもありません。



バプテスト派の人は特に「浸礼」ということを言うわけですが、浸る方で、上からただちよつと水を注ぐくらいのことではない。とつぷりと全身を浸す。もともと「バプテスマ」というのはそういう意味です。水の中に浸ることです。それで、文字通りに「浸礼者」と訳した方がいいと思います。

4 浸礼者ヨハネが曠野に現れ、回心の浸礼(バプテスマ)を呼ばわって、

あるいは、「告知して」と言つてもいい。けれども、これは呼ばれるような言い方ですから、「呼ばわって」と、むしろ訳しました。直訳すれば、「罪の赦しへの回心の浸礼」なんです。

回心の浸礼を呼ばわって、罪の赦しへと標した。

と。彼が罪を赦すわけではない。罪を赦すには、別の人がいる。「悔改め」という言葉を「回心」と訳す。「メタノイア」というのは翻す、心を返る、向きを変えることです。向きを回す、向きかえろということなんです。あるいは、心を転ずる、転心。転回するわけです。自分や他人を見ている心を、横や自分を見ている心を、神に向けて、心の向きを変えることが、この「回心」ということです。「悔改め」というと、何か今までやったことを悔いて改めてということでは、相変わらず自分のことを考えている。悔いて改めて、自分を良くしようとする。いくら悔いて改めて自分を良くしようとして、もしそれで良くなるなら、もう私は落第です。しかし、ありがたいことには、自分を良くしようなんて考えなくてよろしい。

「向きを神に向ける。神さまに向きを変えよ。心を廻せよ」

ということなんです。

「廻せる」で思い出すことは、旧約聖書の列王記略上18章のところに、エリヤが偽りの預言者たちと

「どちらが本当の神さまか」

と争うところがある。バアルの神を愛する預言者に対して、エリヤはイスラエルの信仰の回復のために――イスラエルそのものが向きが変わっているから、その向きを変えようとして――神さまの方へ向きを変えようとして戦った中興の預言者です。非常に大事な預言者です。36節に、

「³⁶晩の祭物を献ぐる時に及びて預言者エリヤ近よりて言いけるは、アブラハム、イサク、イスラエルの神エホバよ、汝のイスラエルにおいて神なること

および我が汝の僕にして汝の言に循いて是等の諸の事を為せることを今日知らしめたまえ。³⁷エホバよ我に応えたまえ我に応えたまえ、この民をして汝

エホバは神なることおよび汝は彼等の心を翻したもうということを知らし

めたまえと。」(列王記略上18・36～37)

ここに「心を翻す」という言葉がある。この「翻す」という言葉は「めぐらす、ぐるつと変える」という「サーバツプ」というヘブライ語です。あるいは、「シューブ」という「向きを変える」という言葉です。



●回心のバプテスマ

回心の浸礼です。心をめぐらす浸礼を、バプテスマを呼ばわって、罪の赦しへとしるべした。そこで、二箇所参照していただきたいのは、マタイ伝3章2節のところに同じようなことが出ている。

「なんじら悔改めよ、天国は近づきたり」（マタイ3:2）

これがマタイ伝。これは洗礼のヨハネが語っているわけです。

「なんじら回心せよ、天国は近づいた」

と。ルカ伝3章7節には、

「7……『まむしすえ 蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。

くいあらためふさわ 8さらば悔改に相応しき果を結べ。なんじら「我らの父にアブラハムあり」

と心のうちに言い始むな。

「自分たちはアブラハムの子孫だから当然救われると、そんな安易なことを考えた
ら、とんでもないはなしだ」

と。血統が、血の繋つながりがあるから。神さまと人間との関係は、

「親が非常に信仰があるから、その子が自然にそうなる」

なんていうものではない。一人ひとりが全く、各人が神に直結するのであって——ちやうど、
ランケの

「各時代は神に直結する」

という言葉がありますが——各個人は血筋によらず、神さまに直結する。だから、

「アブラハムの子孫だといって、いい気になっているな」

と言う。

「御国の子らは嘆き切齒はがみすることあらん」

なんて、キリストが言っている。

「ユダヤ民族は選びの民であるから、当然だ」

なんて思ったらとんでもないと。エゼキエル書の中にもそういった、

「個人が神にいかにも自由と責任をもって問われているか」

という角度の言葉があります。

我なんじらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起こし得給う
なり。」（ルカ3:7-8）

さすがに預言者らしい言葉です。この洗礼のヨハネという人は実に忽然として現れた。
さきほどのマラキという預言者は旧約の最後の預言者ですが、紀元前444年と言われている
ような、紀元前5世紀頃に出た人です。その後、預言者らしい預言者は出てない。非常に
空白時代がきているわけです。紀元前8世紀の半ばから7世紀に素晴らしい預言者が輩出
しましたが。7世紀から6世紀にわたって、大体150年位の間、非常に空白時代がきた。即ち、



預言者がいないときにあった宗教は何かというと、祭司宗教です。坊さんの宗教です。いわゆるユダヤ教というのが即ちそれなんです。いわゆるユダヤ教は即ち、第二神殿が紀元前515年に建ちましたが、それ以来、エルサレムの神殿中心の宗教が祭司宗教です。非常に戒律的な宗教なんです。預言者の声が絶えてしまった。預言者というのは、神の言を直接に賜って語る者が預言者です。神の言を預かっている。「予」という字よりもむしろ「預」の字を書いた方がいい。

●道標する人

これがイエスと同時代に、洗礼のヨハネがどのような生まれかたをしたかということ。ルカ伝の始めの方に詳しく書いてある。これはイエスと非常に深い関係になっている。これが突然、そのようにして神の声を深く受けまして立ち上がった。これがやがて、太陽を標するところの曙の明星のときものが、この最後の預言者ヨハネであった。浸礼をほどこすところのヨハネであった。キリストという太陽の道標をする人であった。だから、「罪の赦しへと標した」なんて、私は勝手な言葉をつけたんですが、そういうわけです。

ルカ伝は、「こういう時代に、彼は現れた」と、ルカは非常に歴史的にいかに重大な出来事であるかということを感じて書いているわけです。ルカ伝3章の始めのところがそのようなわけです。いかに多くの群衆がそこに来たかということは実に驚くべきものです。兵隊までやって来たり、普通の群衆はそうだし、取税人なんかもやって来た。みんなこれは、バプテスマを受けようと思つてやって来たわけですから、大変なはなしで、ちよつと想像がつかないようなわけです。マルコ伝にも、

5 するとユダヤ全国およびエルサレムの人々がみな彼のところに出てきて、自分たちの罪を告白し、ヨルダンの中に浸つて、彼からバプテスマ(浸礼)を受けた。

「ヨルダンの中に浸つて」と、私は特にそのところは――ギリシア語では三格の「エン」という字が書いてある――「中に」と訳した。ヨルダンの中に浸つて、そして彼からバプテスマを受けた。

6 このヨハネは駱駝の毛皮をまとい、腰には皮帯をめぐらし、蝗と野蜜とを食べていた。

実に曠野の人であるわけです。いわゆる「ナザレ人」と言われる。別なところを読むと、彼はいわゆる酒を飲んだりしない。全然飲まないわけではないでしょうけれども、非常に謹んでいたことが書いてある。

7 彼は宣べ伝えて言つた「私より強力な方が私の後から来られる。その方に対しては、私などは屈んでその靴紐を解くにも値しない。私はあなた方を水で浸礼させたが、あの方はあなた方を聖霊でバプテスマなさるだろう。」



これが非常に大事な文句です。

「聖なる霊をもつて、彼はバプテスマする」

と。マタイ伝とルカ伝をみると、「火と聖霊」と書いてある。あるいは、「聖霊の火」と言ってもいいくらいなわけです。火と聖霊。「聖霊でバプテスマなさる」ということです。

●死生の転換

「水の中に浸る^{ひた}」ということとは、ひとつの「死」を意味する。古き我に死ぬことを意味する。自分の心を、自分自身を、自己というものを問題にして、自己を充実して育てあげていこうというのは、人本主義的なものの考えかたです。それもそこにもちろん真理はあります。ある意味において、大いにそれでいろんなことが展開します。いわゆる自由というのは、そういった方の角度の自己というものを、他のものに依存しないで、それを鍛えあげて展開していこうとする。いわゆる道徳的修養、文化的展開の角度はみなその角度です。それは悪くはない。けれども、この福音の世界では――問題は人でもなければ自分でもない――神さまである。自分はもはや問題にしない。神さまを問題にしている。そして、そこから来るものによって、新しくそこに新生を起こそうとする。新しい生命です。死生の転換をなさうとする。

「己の生命を保とうと思う者は却^{かえ}ってこれを失い、自分の生命を棄てる者は却^{かえ}ってこれを得る」

とキリストが言われたのは、この消息なんです。バプテスマというのは、水の中に浸るというのは――なにもそこで水死するわけではないけれども――自己に、本来の我に、そこに死ぬこと。そして、新しき我に生まれ変わること。この転換の事態が、このバプテスマです。そして、

「善^みき果^みを結べ。もう根が腐っているから、そこに斧が置かれる」

と、ルカ伝に書いてある。激しいです。審判は来るぞと。

●ただ神を求める

けれども実は、浸るだけではどうにもならない。水に浸って自分に死んで方向転換をする、その人間の心の求めは非常に大事です。神を求めて、己を求めない。人を求めない。ただ神を求める。

「求めよ、然らば与えられん」

というのは、

「神を求めよ、然らば与えられん」

ということですよ。神を求めて、与えられないことは絶対にない。神さまは自分を与えようとしていらつしやるんだから。我々はいろいろなものを求めて、それで得られないことも



あるかもしれないけれども、神を求めて与えられないことはないわけです。神プラス自己を求めているからいかに。自己や人を求めて、他のものを求めているから。他を求めない。神を一途に求める。キリストが

「心を尽くし、精神を尽くし、全心全霊全力をもって神を愛せよ」

と言うのは、要するにこのことです。同じことです。求め、愛する。我々にとっては、

「そんなことはむずかしくて、とてもできません」

というわけですね。けれども、キリストは水を割らずにそう言われる。

●聖霊のバプテスマ

ヨハネが、

「自分は、そういった方向転換の、回心のバプテスマをここでとにかくするけれども、本当はまだそれで全きわけではない。大事なことは聖霊のバプテスマだ」

と言った。今度は、聖霊の中に浸るということです。

「後からくる力強い人は私たちを水の中に漬けるのではなくて、聖霊の中に漬けてしまうぞ。聖霊浸しをするぞ」

と。聖霊に浸す。御霊に浸す。その聖霊のバプテスマが来たら、本当に今度は生きるということをヨハネが告げている。

9 その頃、イエスがガリラヤのナザレから来て、

北の方のガリラヤのナザレからやって来まして、そして、

ヨハネによってヨルダンの中へとバプテスマされた。

これも「ヨルダンの中へと」です。さっきは「中で」と書いてあった。今度は「中へと」。

ヨハネによって、ヨルダンの中へとバプテスマされた。マタイ伝では、ヨハネが、

「あなたは私からバプテスマを受けるような方ではありませんから」

と言ったら、キリストが、

「いや、今、私はお前から受ける」

と言われた。イエスという方はなにも回心をする必要がない。彼はもうしょっちゅう神さまの方へ回心しているんだ。マルチン・ルターが

「クリスチャンの生涯は一生涯回心である」

ということ、あの有名な「九十五箇条」の第一条で言っている。

「悔改めて福音を信ぜよと言われたこの言葉は、クリスチャンの生涯を通じての言葉である」

とルターは言いました。あの「悔改め」というのは回心のことです。回心また回心。日に日に新たに神に向けていく。



イエスは回心の必要はない。ちゃんと向いているんだけれども、なぜ、それではヨハネから受けたか。イエスという人は、

「自分は神の子である。お前たちとは桁がちがうんだ」

とは決して考えておりません。イエスは実は、私たちよりもっと下にくだっている。我々と同一平面に立っているか、いや、その下にあつて我々を下から支えているような方です。イエスはどん底に立っている。だから、我々の罪を罪としている。我々の罪を罪として、彼はこれを身にかけている。彼自身は罪びとではないですよ。罪をしょっているわけです。イザヤ書53章にあるとおり、彼は我々の罪を負っている。我々の病を担い、罪を担っている。道徳的、魂の上の不完全、また肉体上の病、一切を彼はしょっている。「負う」という字はおもしろいね、これは「マイナス」です。彼はマイナスそのものとなつている。ですので、同じく浸礼を受ける。彼は我々の罪を罪として、回心の浸礼を彼も受けた。自分を何者ともしない、徹底的な神の前の平伏しです。

聖書は、いくら研究したつて、どんなにギリシャ語ができへブライ語ができ、参考書が読めたつて、それはダメですよ。聖書は決して分からない。どんな大学者といえども、神学博士といえども、それで聖書は分かるものではない。聖書は、この聖書の真理の前に、この現実の前に降参するまでは、開かれてこない。これははつきり申し上げます。どうも、

「聖書が分かるの分からないの」

と、すぐ頭のいい青年たちは問題にする。いくら問題にしたつてダメだ。入学試験には通つても、どんなに頭が良かったつて、聖書という難関には通れない。聖書という関門は、その前に自分が完全に平伏して降参するまでは、その扉が開けない書です。キリストが、

「聖書は我につきて証しするものである。私について証言しているものである」

とおっしゃった。聖書の主体はキリストですからね。このキリストの前に、

「参った！ あなたの前には無条件降伏です！」

と、無条件降伏するまでは、これは開かれない。ところが、人間はなかなかこの無条件降伏ができないんです。

ところが、イエスは自分を何者とも思つていらつしやらない。我々の情けなさ、頑くなさ、神への反逆をみんな背負つて、深く水の中に入つて、回心のバプテスマを受けられた。これが、神の子イエスのイエスたるところなんです。自己を何者ともしない。彼は無者である。本当の無者である。これはニヒリズムではない。この「無」は虚無ではない。実存的に無者ということとは、

「無私者という、私の無き者、私心の無き者」

ということですよ。私無き、私心無き者で彼はある。私心が無くなると、人は本当に清らになるし、本当に強くなる。

「則天去私」という。キリストこそ本当の則天去私です。天に則して私を去る――漱石さ



んは一生懸命やっていただけれども——則天去私とはキリストのことです。則天去私を真正面に、100%にした者はキリストである。

●キリストの中に

そういうバプテスマを受けられましたから、

10 流れの中から上がると、たちまち天が裂けて、鴿の如き御霊が彼の中に降^おりくるのを見た。

この主語は「彼」「キリスト」です。

「キリストは水の中から上がると、たちまち天が裂けて、鴿の如き御霊が彼の中に、自分の中に降^おりてくるのをご覧になった」

と。マタイ伝やルカ伝よりも、このマルコ伝の方が非常に直接的に書いてある。この「中に」ということ。私は特に「中に」と訳した。マルコ伝ではこの「中に」という言葉が使っています。「エイス アウトン」「彼の中に」という。しかし、その「エイス」と書いてあるのがむしろ少ないから、学者たちは

「それは上に、『彼の上に臨む』と言った方がいいのではないか」

と言う。それは聖霊の事態が本当に分かっていない。聖霊は、ただ「上に」ではない。「中に」入ってこなければダメです。聖霊は私たちの存在の中に入ってこなければ、本当に聖霊を受けたということにならない。マルコ伝は実は、その故に非常に正しい。私は大胆に、

「聖霊が彼の中に降りてくるのを見た」

と訳したい。

「たちまち天が裂けて」とある。この「たちまち」という、非常に電光石火的な言葉は、マルコ伝の特色なんです。この「たちまち」（直ちに）という言葉が、学者の計算によると、マルコ伝の中に41回出てくるそうです。ペテロがその「たちまち」的な人間なんだ。だから、ペテロの影響を受けている。ペテロというのは、何かキリストから言われたりされたりすると、たちまち動くやつだ。ペテロというのは「たちまち」という人間なんだ。非常に直情径行であるわけです。

「天が裂けて」という言葉がある。これはイザヤ書64章1節に同じ表現が出ている。

「願^{さき}くはなんじ天を裂てくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを」（イザヤ64・1）

このイザヤ書63章の後半から64章にかけて、第三イザヤといわれるところの預言者が、「イスラエルの信仰が硬化してしまって、どうにもならない。どうか、あなたが天から降って来てください。天を裂いて臨んでください」と言っている。激しく求めているところの事態なんです。

霊界の天です。自然科学的空間の天ではない。霊界の天を裂いて、



「御霊が鴿の如く」

と訳してありますが、

「鴿の如き御霊」

と、ギリシャ語はむしろそう読んだ方がよさそうです。

「御霊が形をなして」

とルカ伝にも書いてある。現象的にそう見えることがあるわけです。「鴿」というのは平和と純潔、また霊的な実存の象徴です。天使が羽を持っている。こういうのも霊的な世界では見えることがある。

一体、聖書という現実是非常な、高次な、霊的な現実でありまして、普段の我々いわゆる文化人とはちよつと次元が違うんです。だから、不思議なことがたくさん書いてある。しかし、お伽話のように思うかもしれないけれども――それは中には神話的なものもありますよ。けれども、そういった神話的な表現とか、或いは今の「鴿の如き御霊」なんていう表現が我々にはピンとこない――けれども、霊の世界が決して観念的な精神ではなくして、正に具体的な霊であるということに気がつかないと、そのことを真正面から受けていけないと、聖書が読めない。

私なんかは、そういった現象面では、まことにダメな男ですけども、しかし、不思議なことに、そういうことが無理なしに「そうだ」と受けとれるようになったというのはどういうことかというところ、この聖霊のバプテスマを受けてからなんです。根源の世界に魂が触れてきますと、現象面はたとえ自分自身が経験しなくても、

「それは在り得ることだ。確かにそうだろう」

ということが楽に受けとられてくる。

●使徒的な信仰

「御霊のバプテスマを」というものが実は、キリスト教の世界において今、重大な課題であると思う。1962年2月に私はハンブルクで講演したときに、

「聖霊のバプテスマということが今は火急の問題である」

ということを書いて来ました。向こうでも結局、バプテスマというものがいわゆる「浸礼」にしろ「洗礼」にしろ、そういった水のバプテスマで終わっていて、聖霊のバプテスマに来ていない。ところが、洗礼のヨハネが宣言した中で一番大事なことは何かというと、

「あの人は御霊でバプテスマをする人である」

ということを書いたことなんです。マルコ伝の開巻第一頁にこのことが載っている。そして、マルコ伝は

「福音の始めはこうである」

と言いながら、これは実は福音の終りでもある。



「我はアルファにしてオメガなり」

とキリストが言われた。この聖霊のバプテスマが来ないことには始まらない。

内村鑑三先生の悲願は、この使徒的な信仰に向かつていた。私たちは、使徒的な信仰へといよいよ——この信仰の世界は「ここがいい」なんていうところは——限りなく進んでいく。どんな人でも、「これでいい」というところはひとつもありはしない。ただ無限に進んでいく。

「私は使徒的信仰を今、持ちました」

なんて、そんなことを言っているのではない。限りなく進まんとしているだけです。イエス・キリストが何とおっしゃったか。

「我何^なことも為しあ^なたわ^なず。神さまが為^せよということをしていただけだ。私は

何も言うことができない。神さまが言え^いということ^{こと}を言っているだけだ」

とおっしゃった。イエスは終わりまで、自分を何者とも思っていない。この御霊のことにしても、聖霊を受けていながら、

「私は霊的人物である」

なんてキリストは決して言わない。いつも、御霊は、神さまから賜っているところの、そして常にそれが泉の如く流れ、光の如くに流れている事態です。淀んでいない。

そういう御霊のバプテスマということがいかに大事か。パウロが、

「御霊を宿^すさる者はキリスト者にあらず」

と、ローマ書8章で言っているとおり、聖霊を宿していない者はキリストのものとは言えない。キリストについて、言っている、キリストを外から信じて、キリストの中に入って——聖書についていくら語ってもダメです、聖書の中から語っているのだければ——神の真理の中から、イエスの中から語っているのだければ、それは本ものではない。また、私がもし、この中からの事態にいないならば、皆さんとこんなところで集会なんかすることは、してはいかん。

パウロの書簡には

「キリストわが中^{うち}に」

という、この「中に」という消息が非常に強く出てくる。それはパウロがまたヨハネが、ペテロがこの「中に」いたからです。

イエスは、神の前に本当に平伏^{ひれふ}して、無私となつて、自分を完全に明け渡したから、そして、神に向かったから、キリストの回心は本当の回心である。もともと回心していらいっしやるけれども、常にめぐらしている。自分の魂の扉を全開して、神に向かっている。そうすると、神さまはそこに入ってくる。

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧^ひしき人。天国はその人のものである」（マタイ5:3）

と、イエス・キリスト自身がこれを告白された。これは告白ですよ、教えではない。イエス・



キリスト自身が霊が貧しいので、自分は何者とも思っていない。これが「霊が貧しい」ということ。魂が貧しいというのはそういうことです。自分を何者ともしない。そうしたらば、天国、神という天国が、彼の中に入ってきた。イエスにとっては、神さまが天国なんです。神が在るところに天国があるのであって、天国が他にあるのではない。神の在^{いま}し給うところ、そこが天国なんです。

「神は向こうにいるが、ここに天国がごぞいます」

なんて、そんなものではない。

では、神という天国は一体、どうして生ずるか。神の霊です。神の霊が入ってくるときに、神の霊が即ち、天国の具体的内容です。

「天国はその人のものなり」

と。これがキリストのあの山上の大告白――山上の「垂訓」ではない――の第一言である。あれを「教訓^{おしえ}」だと思つて、一生懸命でまねしようとしたつて、それはダメですよ。イエス・キリストが告白したんだから。その中にこちらが、キリストの中に今度は私たちが入ればいい。

霊的天界が開けて、そこから鴿の如き姿の御霊がくだつてきて、彼の中に入ってきた。深い祈りの世界では、輝かしい火の玉の如きものが、おなかの中にグツと入るようなことを経験することがある。そういうことを私に告白した人がある。そうなんです。そうすると、ガラリ変わる。

自分を問題にしたつて、百年たつてもダメですよ、そんなものは。問題は、このあるがままの自分を投げ出していく。なにもヨルダン川に行かなくてもいい。ヨルダン川までわざわざ行つて、昔のまねをする必要はない。皆さん、この会場そのもので一向差し支えない。内村先生が無教会と言つたのは、何か建物や、何か場所や時を問題にしているのではないということ、内村先生はああいう言葉で言われるわけです。無教会では、

「洗礼も聖餐もいらん。そんな儀式はいらん。そんなものは形式にすぎない。やめた」

なんて。いいですよ、それはやめたつて。けれども、今度は本当の聖餐、本当の洗礼を我々が受けなかったならば、それは聖書の事態に反するわけです。実は、洗礼・聖餐は一つなんです。非常に大事なことです。形式を破るならば、なぜ実体を本当につかまえないか。無教会にもし問題があるなら、私はそこにあると思う。事実、そういうことになっているから仕方がない。私は無教会の出身だから、自己批判の意味で言っている。なにも人の悪口を言っているのではない。

●十字架のバプテスマ

聖霊のバプテスマということが死活の問題である。イエスはそうにして、浸礼が同時に聖霊のバプテスマとされた。ここが非常に大事なことです。自分を明け渡した回



心が、同時に新生、聖霊のバプテスマという新生となったということは、では、私たちにおいては、どういう事態であるか。私たちは回心しても、回心しきれない。したつていいですね。しなくてはならないです、ある意味においては。その求めは大事なことです。

「求めよ、さらば与えられん」

と言うけれども、しかし、この回心は、一体どこにおいてなすか。心をひるがえすということは、一体どこでできるのか。砕けない心が砕けるのは、どこで砕かれるのか。なかなか砕かれない。一時的には砕けても、またもとのもくあみ。クリスチャンだって、いつもしよつちゅう、もとのもくあみになったり、まあいろいろなことです。けれども、自分の心の動きや実存のいろいろな変化にもかかわらず、或る土台となるものがある。回心の土台となるものがある。それが十字架です。

マタイ伝10章34節から、

「³⁴われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜん為に來れり。³⁵それ我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分かつたん為なり。³⁶人の仇はその家の者なるべし。

非常に不和のことが、危険思想みたいなのが書いてある。

³⁷我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。³⁸又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相應しからず。」（マタイ10・34～38）

非常に激しいことが書いてある。これができるかという。ルカ伝12章50節を見ましても、

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

この「火」というのは聖霊の火のことです。さっきの「火と聖霊」と言つた「聖霊の火」のことです。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」

イエスがこの場合に、

「受くべきバプテスマあり」

と言われたのは十字架のことなんです。

マタイ伝のように

「自分で自分の十字架を負わなければ」

と言われたら、これはみんな落第なんだ、私たちは。ある程度は負えるかもしれませんがね。けれども、本当に負えるということがどうして可能であろうか。それは私たちのために、十字架を負ったところのキリスト、キリストの十字架があるからです。キリストはヨルダンでバプテスマを受けられたが、もう一つバプテスマがあつた。それは十字架というバプ



テスマである。回心のバプテスマ、聖霊のバプテスマ、そして十字架のバプテスマという、この三つのバプテスマがある。

イエスはこの十字架のバプテスマを受ける。これが、私たちが神の前に碎けないところの心を本当に碎けの心に、碎けの魂にもつていく。

「これを視よ」

と。私たちはどうしても、本当に神の心に合い、モーセの十誡を全部及第するような人間には誰もなれない。全部、落第生です。いわんや、キリストの山上の大告白に出てくるところのものは、モーセの十誡以上の激しい言葉です。キリストは水を割らないで言う。それをみんな水を割って読んでいます。水を割って読んだらダメですよ。

「水を割らない言葉をそのまま受けて、こっちはみんな落第するか、降参しなさい」と、さっき言ったんです。

「それはこの程度は、何%は私はできますが、それで勘弁してください」

なんていうのは福音ではない。福音は、水を割らないキリストの激しい言葉に100%にいくか、あるいは全部ダメか、どっちかなんだ。「へえ〜」と思うでしょ。「へえ〜」じゃない。本当にそうなんだ。

その砕けざるどころの、どの言葉も全くこれを満たすことのできない私たちです。けれども、神さまは審判者ではない。もともと、神さまは私たちを救おうと思っている。けれども、救おうと思っているけれども、我々をいい加減には取り扱わない。いい加減に取り扱わないで救おうとしている道は、ただ一つしか神さまに残っていないかった。それは、キリストを、全く神の御意に従っているこのキリストを、イエスを十字架につけるといいう道です。

「なんじは十字架にかかれ。死の、血のバプテスマを受けろ」

と。この血のバプテスマにおいて、私たちの贖罪、罪の赦しという――さっき洗礼のヨハネが言った「罪の赦しへと」という――あの罪の赦しです。

「回心の浸礼を呼ばわって、罪の赦しへと標^{しるべ}した」

と私が訳しましたが、その「罪の赦し」というのは、ヨハネがするのではない。ヨハネはそんな権威はもたない。罪の赦しの権威をもつのは、罪を赦す実力をもっている者だけで、これはキリストだけ、イエスだけです。

この「罪の赦し」ということ。「罪」とは自己に執すること、自我というやつです。自我に執する心。神に即しない。即天のできない我々。それを、キリストは、

「もう、それは問題要らん。そんなことは問題要らん。私が全部それを引き受けた。

私がこの十字架で引き受けた」

と。これは歴史の終りに到るまで、いかなる国の人も絶対無条件に受けられるところの、絶対恩寵です。これを受けるか、受けないか。この驚くべき十字架の恩寵の前に降参するか、しないか。「信ずる」とか「信じない」とは、そのことです。



「その前に降参する」

ということが「信じる」ということなんです。

「イエスは神の子である」

という、そういった命題や、ただそういった事実を客観的に「そう思う」とか「信ずる」とか、そんなことではない。「受けとる」「信受する」というのはそういうことです。

●十字架の言

キリストは私のために、皆さん一人びとりのために十字架を負われた。これは罪の赦しの「十字架」という驚くべき言葉なんです。絶言の言。言葉を絶したところの本当の言というのは、十字架という驚くべき行為なんです。だから、私は、言即行と言う。行為ほど激しい言葉はない。人間の魂を本当に動かすものは、或る人の実存的な行為であって、言葉ではない。だから、

「始めに言あり^{ことば}」

とヨハネ伝に書いてあるけれども、それを

「始めに行為あり」

とゲーテがああ『ファウスト』の中で訳した、あのゲーテの気持には非常に大事なものがある。

そういう、言即行、行即言というような、

「十字架という言」

とパウロが言った。「十字架の言」というのは、十字架が発するところの、この事実が発する驚くべき恵みの言葉ということ。その前に降参するわけです。もはや、頭ではどうにもならん問題です。

「なるほど、福音というものは全存在をもつてぶつかなければつかめない、いや、つかまれない世界であるなあ」

ということをしみじみと感ずるわけです。研究や勉強なんていうことでもつて分かるなら、それは人間の、プラトンやカントの書いたものを読んで、それで救われるでしょう。どんな素晴らしい人間の文書も人ひとりの魂を救うことができないとは、どういうことか。それは、神さまの言葉はいわゆる言葉でないからです。力をもったところの、事実から発しているところの告白である。

十字架において私たちは罪の赦しを与えられる。

「我キリストと共に十字架せらたり。我生く。されどもはや我にあらず。キリ

ストわがうちに在りて生き給うなり」（ガラテヤ2・20）

と。パウロが

「キリストわがうちに在りて生き給うなり」



と言うときの、その「キリスト」というのは何ですか。御霊のキリストです。

「御霊のキリストがわが中で生き給う」

というのは即ち、私たちがキリストの十字架を無条件に「はいっ」と言って、その前に降参して受けるときに、もはや、過去の現在の未来の「我」なんていうものは問題でない。そして、すっ飛ばされたところが、本当の悔改め、本当の回心のバプテスマなんです。我々は水に浸からなくなっている。十字架において本当の回心のバプテスマを受けたら、直ちに聖霊が来る。直ちに。魂が^あ開放されたんですから。自分では自分の扉を開けられませんが、100%に。ところが、キリストは100%に開けてくださった。

「お前の魂は、完全に私が開放した」

と。罪から、自分というものから解放した。

「お前は本当に自由になった。空を飛ぶ鳥よりも、燕よりもお前の魂は自由になった。相変わらず、お前さん自身はどうだって、そんなことはもう、そんな波風は問題にしないでよろしい。その奥に驚くべき絶対空間がある。その絶対空間の中に私は臨む」

というのが、この聖霊です。だから、十字架を本当に受けるところには、直ちに聖霊のバプテスマがくる。イエス・キリストがヨルダンで、回心のバプテスマを受けたら同時に、水からあがったら、たちまち天が裂けて、鴿の如き御霊が彼の中に臨んだというのは、このことです。これは、イエス・キリストはそのことをなさったが、私たちにできないことではない。何となれば、キリストのこの十字架は、

「私が受くべき最後のバプテスマ、これを受けたら、お前たちには自由に聖霊が臨んでくる」

と。なぜ、「十字架、十字架」と言いながら、聖霊を受けないか。それならば、十字架は観念になっている。皆さんの中に本当に、十字架された我、我というものをそこに受けとったときに、何かしらんが、フツと魂の軽くなったときに、入ってくるものは聖霊です。その時に、本当に「主よ！」と呼んでごらんください。

「御霊の主よ！」

と、心の奥底で呼んでごらんください——何も叫ばなくなっている。沈黙の雄叫びでいいから——その時に、臨んでくるのが聖霊である。そこが祈りの世界なんです。祈りとは、神さまとの魂の呼吸の世界ですから。その時に、自分を見ているのでも、ただそういった事態を思いこんでいるのでもない。具体的に「おつ、K君！」と言って、私が久し振りで会う人に言うように、「神さまー！」と言って、

「キリストさまー！」

と言って、でつくわす。その時に何かしらんが臨んでくる新しい力、新しい生命、そこが聖霊の世界です。



「どうも、その鴿の如きものが見えませんが」
なんて、何を言っているか。そんなものは見えなくていい。

●御霊の世界

これが具体的な霊の世界なんです。魂がもっと大胆に、大胆率直に聖書の世界に、素晴らしい次元の世界に、根源的に――現象的ではないですよ――根源的に入ってごらんさい。そうすれば、神さまはその人を通して何か現象しようとするときには、自由自在に現象なさる。私の如きものを通して、いくらでも不思議なことを既になしてきなさった。それは、御霊の事態に私が入ってからで、いわゆる無教会にいたときには何も起きなかった。何と言われても仕方がない。事実だから。どこの教会であろうと、カトリックであろうと、無教会であろうと、いわゆる幕屋であろうと――「幕屋」という言葉を言いはじめたのは私ですよ。けれども、九州の方で「幕屋」という言葉を非常に使って、今なかなか盛んにやっておられる。しかし、少しいろいろ違うところがあるので、私はむしろ幕屋という言葉はここで控えます。けれども、言葉ではない。幕屋という事態は非常に大事な聖書的な事態だから――この御霊の世界に本当に入ったら、もう新しく、常に新たにこの聖霊の呼吸の世界に入る。祈りも、電車の中でもどこでも、目をつぶれば祈りの世界に入れる。

「汝ら、祈るときに密室で祈れ」

というから、

「では、自分の密室の戸を閉めて祈るのが本当の祈りか」

なんて、そんなことではない。目をつぶれば、それが戸を閉じた世界で、どんなに外側が肉の耳に騒がしくても、祈りの世界に入れる。混んだ電車の中で目をつぶって祈っているのが一番いい。とにかく、この世界に入ると、自由自在になる。そういう体験をしてから、私はとにかく事実、楽になったんだから仕方がない。「福音」というけれども、「楽音」になった。楽しい音ずれです。「ユウアンゲリオン」というのは「喜びの音ずれ」という。楽しみの音ずれ、喜びの音ずれなんだ、この「福音」というのは。

イエスのバプテスマは、

「イエスはそうだったけれども、我々はどうにもならない」

ではない。聖書のいかなる不可能の事態でも、キリストの中に入れば、そこから可能になるんです。相変わらず、私たちはびっこですよ。できることは実に惨憺^{さんたん}たることですよ。けれども、それはもはや造り花ではない。本ものなんです。本ものだから、どんなに不完全であつても、これは生きている。そして、これが「父の全き」に向かつて進んで行く。地上では全きにならない。私なんかは三日月で済むかもしれない。けれども、必ず満月になる。これははつきりしている。私の力ではないんだから。これはキリストの御霊の力なんだ。



「神の国は言葉にあらず、力にあればなり」

とパウロが言ったその「力」とは、このキリストの生命、キリストの御霊の力がかくなきしめるということ。今、このキリスト教界で一番大事な問題は、この聖霊のバプテスマです。イエスがヨルダンで受けられたこの聖霊のバプテスマを本当に、十字架と御霊ということにおいて受けとることが、これが急務である。ここを本当に突破した者は――だから、私は「突破の神学」なんて言っただけでも――ここを突破すれば、それから本当に始まる。そして、もう聖書が実に楽しく喜ばしく読めてくる。

●神の栄光の現れ

祈りの世界では、体裁なんかいらぬ。いろいろな現象が、この聖書だつて起きている。聖書における驚くべき現象をとりすましておいて、我々における現象ぐらいのことでもつて、

「ああ、どうも変だ。どうだ、こうだ」

なんて問題にするようだったら、

「それでは、なぜ聖書を変だと言いませんか」

と私は言いたい。聖書の次元は驚くべきものです。使徒行伝を読んでごらんさい、パウロやペテロのしたようなことを。驚くべき次元に彼らはいた。

どうか、皆さん、生命の世界は、この魂の世界はごまかしがきかぬから。いくら思い込んだってダメなんです。その中に自分がとっぷりつかぬ。御霊の浸礼、御霊を浴びて、御霊に浸るということがどういうことであるか、ということに次第に体験していく。その関門は十字架です。十字架を抜きにして御霊を求めても、それはダメです。それで一生懸命でやってね、それは霊は来ますよ。ところが、うっかりすると、それはとんでもない霊にとりつかれたりする。神さまの、キリストの御霊の世界は決して傲慢にならない。ところが、いわゆる霊的なものはヘタすると傲慢になる。霊的傲慢というやつは、これは一番の恐ろしい罪です。

十字架と聖霊とキリストの復活の生命というものは、三つの切つても切ることのできない三相一貫の事態である。このことがバラバラになっているものだから、聖書が本当に生命となつてこない。文字のただ研究、分析、総合ばかりやっていてはどうにもならぬ。実は、その三つの相は一如であつて、この一如一体から限りなく展開していく。東洋的な思惟がこの聖書の現実非常に一つなのです。

だから、皆さん、我々が本当に新しく聖書を自分のものとして、あなたの方の中から光が発し、あなたの方の中から生命が流れていくような、そういったキリスト者にならなければ、使徒たちや預言者たちが嘆きますよ。そうしたら、あなた方は何をなさろうとも、一切の営みが本当の展開をする。限りなく展開する。芸術をする人なら芸術が展開する。事業をする



人なら本当に事業する。これは御利益ではないですよ。神の栄光の現れとして展ずるんです。御利益的に自分の何かと考えていたら、どこかで必ず行き詰まります。神の栄光として、神の大能大知の現れとして展開していく。

どうか、今の学生諸君はここに目覚めて、本当に進んで行ってください。日本人というのは本来優れた性格をもっている。せっかく素晴らしい天稟^{てんぴん}がみんなあるくせに、なぜ、それが本当の底力のある展開をしないかということは、このような福音の事態に魂を打ち込んでいかなからです。信仰の世界に入ると、何か狭くなると思っている。とんでもないはなしだ。一番広くなる。だから、私はさっきの讃美歌で

「神の恵みはいと広きかな、高きかな、深きかな」

というのを歌っていただいたのはそのわけなんです。

どうか、そういう意味で、今日は晴々とした天気で素晴らしいですが、この青空よりももっと素晴らしい青空を心にもつ。日本人は太陽を持っている。日本の国旗は太陽ではないですか。世界に一番素晴らしい国旗です。自分自身が即ち、国旗のごとく、キリストという太陽をうちに宿して、無色透明体となって進んで行こうと、こういうわけです。

そういうわけで、聖書というのは何とまあ楽しい書だろうということを次第に味わっていただきたいと思います。おしまい。

